

十字架にかかり、亡くなられた主イエスはアルマタヤのヨセフという人が自分のために用意していたお墓に葬られました。聖書は、この世的に見れば主イエスは最後を遂げてしまった、もう再び人々の前に現われることはできない状況に追いやられたのだと記しています。お墓には大きな石が置かれました。番兵が見張っていて、石には封印がされていました。それは、人間的な全ての手段をもってしても主イエスを運び出すことは出来なかったと述べているのです。翌日の土曜日は安息日でした。この日は歩く距離も仕事も厳しく制限されておりますので、皆主イエスに心を寄せながら、自分の家を離れるわけには行きませんでした。しかし、特に婦人達は香料の用意をしていました。その心は決して安息してはいませんでした。

日曜日、待ち兼ねたように婦人達はお墓に向かいました。そこで復活のメッセージが語られることになるのです。復活のメッセージは意外に簡単な一言であります。すなわち、お墓が空であった、ということです。彼女達は主イエスの遺体に香料を塗るつもりでした。あの重い石を自分達が転がすことは不可能でした。誰が自分達のために石を転がしてくれるのだろうか、と歩きながら心配していたのです。しかし、墓に行くと石はすでに転がされておりました。しかも主イエスの遺体は見当たりませんでした。そして輝く衣を着た二人の人がそばに現れました。婦人たちが恐れて地に顔を伏せると、二人は、「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出さない。人の子は必ず、罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活することになっている、と言われたではないか」と伝えたのでした。お墓は死んだ人のいるところですが、主イエスは亡くなられた、そしてお墓に葬られた、だから今でも遺体がお墓にあるはずだ。そう考えていた彼女達に、主イエスの真の姿を思い出させる言葉でした。

復活の主との出会いは、疑いを持っているものや心の目が閉ざされているものには与えられませんでした。信じるものには必ず大きな喜びが与えられました。それは真実でありました。悲しみと失望の中に主イエスを探すのではなく、喜びと希望の中におられる主イエスを探し、出会いなさいということだったのでした。

主イエスは天国を伝えられました。それは、主イエスが今ここにいるから与えられる、ここにおられないから与えられない、そのような場所や時間に制限されたことではありませんでした。主イエスによって、涙を止めていただいた人も多くいました。主イエスの存在は、時間を越え、距離を越えて人々に救いをもたらしたのでした。主イエスが十字架にかかれたことによって、すべてがなくなってしまうことではなかったのです。二人が彼女達に伝えたのは、私達の心に生き続けておられる主イエスを捜しなさい、死者のなかに主イエスを捜すのではなく、生きておられるその事実を受けとめ、伝える者となりなさい、恐れの中にとどまっているのではなく、その復活の喜びを伝えるものとされていきなさい、そう言っていたのです。

私たちは、死んだ者のなかに、主イエスを捜していることはないでしょう。主イエスはもう天にお帰りになってしまった、今ここにはおられない、目に見えない、結局のところ自分自身しか頼りによるものはない。そう考えるならば、私達はお墓のなかに主イエスを捜した婦人達と同じであります。有限な中でのみ、主イエスを探そうとしていることが殻です。

それは、主イエスがお墓からいなくなったのはどうしてか、人間的に追及して、人間的に答えを出そうとすることです。主イエスの復活は、慰められ、強められ、福音を伝えられた者たちが、今もそしていつまでも主イエスが共にいてくださる、そして自分達はその証人なのである、そう受け止める者と共にあり、その事実を心に刻むものが、復活の主に出会えるのであると言っているのです。お墓が空であったというのは、私達が自分の常識や自信、そうしたことに縛られずに解放され、主イエスの存在や教えに心を向けることの大切さを示しております。婦人達が体験した復活の主との出会いは、彼女たちだけのものではなく、全ての人々に与えられることを教えています。永遠に絶えることがないと言われた主イエスのみ言葉をはっきりと示したのが、主イエスの復活だったのです。

私達もまた、復活の主との出会いをこのイースターに新たにしたいと思います。自らの不自由さから解放され、共に復活の喜びを祝いたいと思います。イースターおめでとうございます。